

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2019. 8



令和元年8月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第8号

No.735

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一九年八月号(通巻七二五号)

私と短歌との出会い(204)

随念京子 19

第一歌集の頃

横田敏子・茂木 斌 100

■歌壇月旦

73

ニューウェーブの女性歌人問題

玉井綾子

◇今月の二十首詠……震災いまだに

金澤孝一 2

■作品

奥田清和・奥田陽子他 4

A

青田不二子他 20

B

伊波千賀子他 54

C

池上久代他 68

A

高取尚子他 82

■六月号作品批評

74

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 52

A……………福田庸子・片岡邦子

梅本武義・上林節江

B……………茂木 斌・深井喜久代

オリープ集…浜谷久子

C……………市原やよひ

■オリープ集

柴田登志恵・庄野ひろ子他 42

◇今月の二人

遠藤千恵子・丸山 修 16

香川進の生きものの歌 10

田土成彦 14

■藤田美智子歌集『徒長枝』批評

久保田登 38

かなしみの共有

本田一弘

もごせなあ。

久保田登

■報告・第67回地中海全国大会(新大阪大会)

藤田しん子・横田美穂子 48

佐久間 晟

香川進師つれづれ 3

香川進の略歴

15

私と短歌との出会い(204)

随念京子 19

第一歌集の頃

横田敏子・茂木 斌 100

■歌壇月旦

73

ニューウェーブの女性歌人問題

玉井綾子

◇今月の二十首詠……震災いまだに

金澤孝一 2

■作品

奥田清和・奥田陽子他 4

A

青田不二子他 20

B

伊波千賀子他 54

C

池上久代他 68

A

高取尚子他 82

■六月号作品批評

74

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 52

A……………福田庸子・片岡邦子

梅本武義・上林節江

B……………茂木 斌・深井喜久代

オリープ集…浜谷久子

C……………市原やよひ

■オリープ集

柴田登志恵・庄野ひろ子他 42

◇今月の二人

遠藤千恵子・丸山 修 16

香川進の生きものの歌 10

田土成彦 14

■藤田美智子歌集『徒長枝』批評

久保田登 38

かなしみの共有

本田一弘

もごせなあ。

久保田登

■報告・第67回地中海全国大会(新大阪大会)

藤田しん子・横田美穂子 48

佐久間 晟

香川進師つれづれ 3

香川進の略歴

15

私と短歌との出会い(204)

随念京子 19

第一歌集の頃

横田敏子・茂木 斌 100

■歌壇月旦

73

ニューウェーブの女性歌人問題

玉井綾子

◇今月の二十首詠……震災いまだに

金澤孝一 2

■作品

奥田清和・奥田陽子他 4

A

青田不二子他 20

B

伊波千賀子他 54

C

池上久代他 68

A

高取尚子他 82

■六月号作品批評

74

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 52

A……………福田庸子・片岡邦子

梅本武義・上林節江

B……………茂木 斌・深井喜久代

オリープ集…浜谷久子

C……………市原やよひ

■オリープ集

柴田登志恵・庄野ひろ子他 42

◇今月の二人

遠藤千恵子・丸山 修 16

香川進の生きものの歌 10

田土成彦 14

■藤田美智子歌集『徒長枝』批評

久保田登 38

かなしみの共有

本田一弘

もごせなあ。

久保田登

■報告・第67回地中海全国大会(新大阪大会)

藤田しん子・横田美穂子 48

佐久間 晟

香川進師つれづれ 3

香川進の略歴

15

(表紙デザイン) Tamiyo Naga

震災いまだに

金澤 孝一

いずこより飛び来たれるやホタルぶくろ乗り出す道辺に恋うかふる里

試みの花は咲かずとう被災地に今年も送らん飛べやサギソウ

見えぬまま今年もまみゆるホーホケキヨ耐え来し八年のはらからの声

彼の日より餌付け初めたる群雀急かしき羽音は旧知のごとく

微動にも未だ身構うわれなるも緊急車両にそ知らぬ危うさ

音たてず飛びゆく鳩のうしろ影仮設の長き人らに啼き来よ

途切れてはたなびく蜘蛛の糸しかと月命日の搜索の朝

ただよえる朝の空気のひとところ見えざる花の香りの近し

昭和二十年陸前高田市生まれ。
仙台市在住。
平成十三年「地中海」入会。
済の会所属。
歌集に「金澤孝一歌集」がある。

辿りたる小さき峠を下りつつ視線は盛り土のあらざる生家

嵩上げを逃れいるがにぼっぽと明かりは丘の傾りに揺るる

津波あとにわが身削りて手を伸べるカタクリ山の花は失せたり

人はまだとつぶやき聞こゆ電柱の群れは更地にしらじらと佇つ

分け入りし森の繁みの目の先を姿なきまま獣がとおる

跳ね返る音との会話の散歩路終わりのなかりきわが道の頭つ

桜咲くそのとき待たずに逝きし友ほころび初むる今年の命日

会うごとに手を伸べくれし彼の友の忌日の読経よ返せよ戻せ

あんぐりと開けたる喉にねじらるる生きよ生きよと黒き無機質

うなだるる悪戯なしし児のごとく秋に身を置く胡瓜がふたつ

コピー機の間行ったり来たりに釘付きぬあの日の揺れにやさしさよ生れ

引き出しのわずかなすき間に見え隠れ今日も紡がんわが伸び代を

作品

A

奥田清和

俗人醉歌

・大

小野雅子

桐の花

・羊

古歌にいふ鳥熊山の夕ぐれは都の通ひ路けはしすぎたる
彦根城玄宮園の茶の席に歴史ただよふ梅の盛りを
産土は延喜式内伊居太宮千年を今に郷人のこゑ

風雲の都のあらしに立ち向かふ歴史を語る祖母の口ぐせ
伝へ聞く維新の志士の妾宅のもみちは濡れて何語るらむ
うつつなきもみちのにしきに立ちつくし津山秀夫は歌詠めずるし
千とせふる織姫の世の郷なれや砧をきくや星の宮あと

奥田陽子

海光る

・羊

大浪美雪

飛鳥山

・森

まさおなる海の中にも吸われゆく身と思うまで立ちていたりぬ
小魚の跳ねるがごとき輝きの海をみてゆく五月の光
海みゆる処に住まん浜辺より帰り来し子の第一声は
貝殻を拾わんと幼き児の言える砂浜いつしか遠くなりたり
海の背そのひと色に養われ育まれゆくころもあらん
黄の菖蒲長くみていし足もとに散りいるを藤の花殻と知る
もの言わず人から見入れる黄菖蒲の波立つさまを水の光を

過ぎし日の校章でありし桐の花うす紫に公園に咲く
新しき教科書ひらく師の手つき表紙にしつかり折り目をつけて
淀君の幸せなりし日の色に大阪城に桐の花満つ
垂直にたく上りて朝空を飛行機雲のまたぎてゆける
父親がもし再婚をしなかつたら生まれ来ざりし天才ひとり
視力うすれゆきたる画家の描きにし牛は大きく地に座りゐる
己が身の醜きことを嘆くのか北斎の竜の悲しげな顔

半世紀ぶりに乗りたる路面電車チンチンと鳴らす音は変らず
北風のまともにも当る飛鳥山こらえてぞ咲くさくらさくらの
目の下を北をめさせる新幹線長き鼻先木々の間に見せ
さくらには背空がよし枝先の花にさやりつつ白き雲ゆく
花の下ブルーシートを広広と場所とりの人ごろり寝転ぶ
花冷えに王子の狐よふさふさのおまえのしっぽ貸してはくれぬか
枝毎に玉なし開く三極は鳥の子色のねりきりのよう

朝井恭子 婚礼

・森

末子なる女孫の婚礼無事にすみふとも涙の溢れいで来ぬ
真白なるドレスの裾を長く引き孫は歩き来パージンロードを
タキシード姿の新郎タケシ君緊張の顔きりりと好もし
三人の娘順々に嫁がせし息子の吐息太くも長し
挙式終えし二人を囲む友人らの歓声高し初夏の午後を
ともどちの祝福うけている孫見つ涙おのずと頬を流れぬ
挙式より帰り来たりて亡き夫の写真に語る一部始終を

磯田ひさ子

樹の花

・森

銀座にもお茶の水にもはつ夏を告げる白花 マロニエ通り
ジョン・レノンの通ひしといふ喫茶店 銀座四丁目の路地の「樹の花」
十五坪の角の二階の喫茶店いづれのテーブルも窓に面して
小窓よりひかり差し込み清らなりレノンの座りしマホガニーの椅子
「樹の花」に寄りしはいつも一人なりおほかた辛き心を抱へ
古稀すぎし今も四十年前も「レノンセット」にゆるゆるほぐる
「樹の花」に憩ふ贅沢なるまほら窓にマロニエの白き一雉

市原志郎

燕

・萬

もう充分生きたと思う時もあり落ち来る雨の音数えつつ
燕が今年雛を解した軒の下今年はしほしそ貸してやれ
五匹の子親を迎えんと声を出す今年の我が家の軒騒がしき
鉢植えの花殻をのみちぎりつつ妻は寂しき歌口ずさむ
家の中を車椅子にて行き来するようになりたり寂しきことよ
孫の目の少しあやしくなりたるを愛いてパソコン遠ざけている
今日梅雨入りというニュースあり寝たまま聞けり雨の小さき音

市原やよひ

青き実

・萬

花桃の青き実拾い集めつつ主役になれぬそを愛しめり
俾ましきニュースを避けてチャンネルを回せど回せど追いかけて来る
帰宅する一人ひとりに報告すつばめ生まれつばめ生まれつばめ
黄の唄一本の糸のごとくに繋がりて生まれし数の分からぬつばめ子
カラスの雛のがれて生れし子つばめの五羽が揃いて顔を見せたり
うぐいすの声テレビより聞こえてそれより他に聞くこともなし
万国旗なぜにはためく建売りの会場に今人影のなく

菊地栄子

余情

・萬

匂やかに微笑むあなたが居るようなひと本もよしかたくりの花
白鳥の頸にも似たりかたくりのまだ閉ざし居る蒼の形
甲高く呼び合う番またしても取り留めもなくうべなう春か
今更に強いて糺さん齡ゆえと屈みがちなものぐさとなり
麻酔薬歯茎に打たるるしはらくを歪めし顔は消すよしもなし
堤防を来たりて触るる八重桜身に寄せて喚ぐ女らゆかし
ジ・エンドのち奏でくるシンフォニー身に新たなる余情をひろぐ

菊岡栄子

友と出会う

・漣

旧友の前谷さんの見舞い受け積もる話の尽くることなし
五年ぶりの友と会えたる喜びの大きくあれば別れの哀し
年賀状の途絶えて二年を埋むるもの時の経つのもつかの間となる
白髪はトレードマークと思ひしも夫を亡くせし悲しみありと
新しき令和の欲びひとしおの宮中参賀の十四万余とぞ

木村文子 満開 羊

残されし父の日記に「満開」と記されており、しばし見つめる桜樹に背をあずけてまだ若い花芽の声に耳をすませる。花球となりて二日でほどけゆくソメイヨシノを人は守りぬ。夕暮れの光を宿しこの春もさくらは金のぼんぼりとなる。咲き終えし蝦夷山桜の足元に黄のチューリップは開き始めてあの春が最後だったと思うとき空を低めて花びら吹雪く。求め来し五年日記に我もまた「桜、満開」今年も記す。

草刈十郎 棟上げ 世

棟上げの槌音高く声こゑの春らんまんの空にひびけり。にはとりの鳴きて静けさ引き立つる子どものあない過疎のこの村さへづりやせせらぎ風音さまさまの音の楽しき春の散策。賑やかな花人の中の乳母車幼子ひとりただ眠りをり。ローカルの一両列車吸ひ込みて山はひたすら笑ひあるなり。大川に掛け渡されし幾十のこひのほり一級河川を泳ぐ。夕焼けにそまり運ばる大ジョッキ久に会うたる友と傾く。

國井節子 椎の実 春

椎の花吹雪となりて舞ひ上がり秋には椎の実あまた降らせる。森かげに月光浴びて玉虫は濃みどり色の勾玉となる。つゆ草の濃き紫の花咲けどそを下されし女は消えたり。沖繩は早くも梅雨のさ中とかあの「ハヤブサ」の行方やいつこ葉桜の下に休めば何鳥か巢穴を守り鳴き騒ぎたり。石垣に色うつしく丸く咲く五月の花よ令和に相応ふ。ベルシャよりアフガンを経て正倉院へよくぞここまでイスラム文化

小泉泰清 令和元年 羊

令和元年曾孫が芽生ゆと聞かされて急に染しも頬のゆるみぬ。この錦秋われは米寿に孫に子が生るるならし心弾みぬ。大空も地球のごとく球形か鴉は沿うて鳴きつつ消ゆる。朝醒めて天井板を眺むるも鬼籍に入りし友ら浮きくる。寄せ植ゑの阜月の紅盛り上がり令和五月は穏やかに過ぐ。鱒入りの梅の古木の白き花輝き放つわれもかくあれ。杖をつき歩めるしばし息切れに喘ぎ佇む薔薇の傍ら。

河野繁子 花 雁

ローソクの炎の形次々と開花し飽かぬ五月のさ庭。一日の花に白さを極めたる神のたまもの大山蓮華。咲き初めし一輪えらび蒼そえ染彩クラブに朝届くる。机の上の蒼ひらきて馥郁と香ればみな筆とまりしと。絵手紙に描かれ届く大山蓮華一期一会の縁むすびと。大き花二日過ぐれば茶の色に老化をたどり木に止まりぬ。この日和逃してならじと新茶つみ干しての午睡長めより覚む。

小西美智子 夏草 大

訪いし家こぼたれ夏草生い茂る売地の看板ぼつんと立てり。「土つきの家など欲しくない」という子息の言をなげきいし人。マンションに住むを好みて手放せる相続されざる土地のふえゆく。住みおりし人の記憶もうすれゆく世代交代すすむこの町。「終活」に土地の処分をうながせるピラがポストに入るいくたび。夏草はひと雨ごとに勢いてえのころ草の群落をなす。子や孫がこの地に生きると購いて夢を見たるはつわものならず。

小林能子

まどろむばかり

・羊

海を渡り来たれる蝶が翅展ぐ『地中海第六十七巻』表紙
はなだいろ天空のいろ薄荷色をまとへる蝶が風に乗り舞ふ
不可思議なるカラージュの石よ 明るみて生命育み動くがにみゆ
ひとの手の温もり保つこの石を懐にしてまどろむばかり
眼帯を外せば右目まぶしくてやつぱり見えぬ左目が哀しい
目を凝らし見れば芝生にムクドリとおぼしき一羽の影が飛びたつ
病棟より電話いただけは安らきて短歌の欲び分かちあふ五月

近藤栄昭

群馬県警

・福

ルーチンか隊員の声かけ静かなり救助の手順確かな口調
山小屋の主人も救助隊員とけが人背負いへりに近づく
ローターの風が木道打ちつける救助のへりは群馬県警
けが人に乗せたるへりの飛び立ちて何もなきこと尾瀬の夕ぐれ
駐車券なくさぬようにと管理人叱られるは恐い古希をすぎても
古希を過ぎ叱られることをしておりぬ忘れることは叱られること
手順としてお金を求む自動精算機叱る人なき街の駐車場

近藤芳仙

カバン

・信

信号を待ちぬし老女の細き杖渡りきるまで脇をかかふる
誰かれの車動かずわたりきる老い人まちてしばし見守る
独りくらす老女と聞けばしばらくを話し相手となりて足らへり
紙コップの熱きココアに声高に話す身の上あかるくはなし
花みつる園の入口ひよどりの渡りあたるを眺め来しとふ
肩掛けのカバンの布地はピンク色老いの詰めたるものにふくらむ
タクシーに杖の老女を乗せながらふびんに思ふは我のおごりか

坂上直美

書に淫す

・天

誇るべきものはなけれど書を愛する心はいささかありと認ずる
死にたしと今は思わず視えるうち何冊となく本を読みなん
死ぬまでに読まねばならぬ書のおまた「栄華」「今昔」「群書類従」
操觚とうことははじめておぼえけりいまさらなれどひとり嬉しむ
死のときの枕辺にある本は何新約聖書いや金枝篇
願いありわが死の床に君あらは「われは生きたり」読みたまえかし
書に淫し詩歌を少し弄び君を愛して我が生の過ぐ

坂出裕子

桃花

・洛

くれなるの桃の花びら淡き濃きかさなり散れる庭の面に
濃き淡き桃の花びら土の面にやさしく散りて春をよるこぶ
指先にひろふ花びらやさしさの染み透りくるほのかなる紅
土に触れ桃の花びらひろふときなべて消えゆく憂ひこの世の
来む春も花に会へるかうつくしき夢のやうなる桃の満開
満開の桃の花びらまなうらに映しておかむ来む春を待ち
明春の桃の花見るたのしみを抱きて生きむつつがなくして

佐久間晟

日乗(二四)

・湾

昨日今日そして明日も来るといふこの現実を如何に生きんか
生きることにはやや飽きたれど何かしら死ぬことは否だただに否
死の世界をもっと教えてくれたなら好きになるかも誰も語れず
口うるさく今日もわれに付き添う妻あればわれは生きているのか
夏の陽もやがて降るらんわれの身を包みて暑くそしてまた寒く
あの世とは誰も知らざりそれゆえに死ぬことは否、何か不安で
香を焚き南無阿弥陀仏とは何のこと見知らぬ世界を信ぜよと言うか

椎名恒治

夏の雲

・橋

着替へを週二度取りに来る妻のいたく老いけると思ふ
日々暑くなりつつ窓の空夏の雲となりぬ寂しく
部屋替ふる度部屋ごと色変ふる鉢の花その名を知らず
部屋は変りたるが電車の音は変らぬ土堤の上走りゆく
昼の暑い道路を少し歩きぬ裏門から表へ抜けて
妻は私の汚れ物を持ちて帰らぬ幾度も通ひぬ
昼の道少し歩きぬ表から出て結局は裏門へ帰りたるのみ

鈴木結志

顔真卿展(一)

・福

書は正に人なり顔真卿の筆致の技をころにきざむ
顔真卿文字組み合わせ筆力に渴筆加え躍動に満つ
右払い燕尾のかたち顔真卿固有の筆の技のするどさ
感情の発露におほゆ顔真卿書法一変顔法きまずく
懷素書の変幻自在あざやかな筆の絶妙見る目はなさじ
趙之謙盛りの隸書代表作重厚にしてあふるるばかり
ととのうる美人蕉氏墓誌名の書の字姿の氣品に満ちる

関根榮子

夏日

・崎

健康に比例するらし髪伸び爪の伸び方意識するあり
氣にしつついまだ参らぬ眼科への道筋にある古りたる社に
ゆつくりと春を楽しむまもなし夏日に咲ききるパンジーやヒオラ
わずかなる庭仕事にも夏日にて首に捲きたりクール・タオルを
家裏にドクダミの花白々と群れ咲き揃い梅雨近づくか
さわやかな五月はいずこ乾きゆく庭草にもたっぷり水やり続く
紅色の紫陽花なりしがこの年は土の酸度か色褪せて咲く

関根和美

渡船場

・崎

麦の穂の波おしよせる黄金の風景のなかふるさとをゆく
赤岩の渡船場すぎゆくままに來て今日こそ乗らんと手をとられたり
なんとという利根の広さと歓声をあげるひとたち東京からの
ばてれん橋こえて入りゆく深き森訪わざるまに様変わりたる
出土せし天目茶碗やきやまんの小びん飾られひかりを集む
水に沿う道に遺され守られて瑪瑙亜美奈女と一族の墓
亡き父の二十三年塔婆あげる母の背丸きふらつきにけり

高尾恭子

もう帰ろう

・大

遊戯王のキラキラカードが見つかりぬ子は三十歳になんなんと
切り札は紙切れになって六歳の子は寡黙なる男になって
「健ちゃん車掌になったか」問う母が古い写真の真ん中に居る
闇米にかえた袖が口惜しとはんぶん巻けた母の練り言
美しき言葉さがして日に三つ嘘をつくとき早口になる
べとついた母の茶碗を洗いつつ寺山修司ほどに憎めず
堀川の土手の桜を仰ぎみる「もう帰ろう」と母の言うまで

高津砂千子

ばら

・風

うた会のほてり残せるうつしみをさやさや撫ずる川よりの風
とりどりの三千本越すばらの花まだまだ生きよと語りかけける
天上の花となりにし姉もまたばらの香りに包まれていん
かき氷君と分けあうばらの園このひとときをゆめ忘れまじ
花もてる楠の大樹のおおどかに揺るるを見上げ香川師しのぶ
くすの木の繁るたもとに手を振りぬ船旅のひと振るに応えて
地よりの風吹きあぐるま屋間の芝生にまろぶ小半時ほど

滝田靖子

レクイエム

・新

荒みある心を抱へてする旅は海側の席に座つて行かう
話しかける相手のあらねばうつすらと口開けてただ居眠りばかり
喧騒の輪の中に席の見つからずひとり初夏の海を見てゐる
レクイエム聴きゐて涙止まらざりわたししからかくも何が溢れる
傷付けるものあらねば自らの愚かな心を苛めてしまふ
何気ないひと言にさへおろおろと言ひ訳をするそれもまた傷
一年に一度ぐらゐは声上げて泣けばいいのか くだらねえ

田土成彦

大三角

・宙

天窓をいつばい開けて満天の銀河を見たし真冬の贅に
家庭用プラネタリウムが指し示す夏の大三角うつつには見えず
シリウスは強くかがやく短命のおのれのさだめ知るかのやうに
三里とはこのあたりかと指に押す今日の歩数計七〇〇歩出ず
ゲンゴロウとタガメの違ひ確かめるパソコン画面のなかの虫たち
ハナカマキリの羽根花びらへ交へしとふ遺伝子はどこから得たのだらうか
誕生日七日といふは運命でこの日かならず歌詠む七首

田土才恵

叔母の声

・宙

三人子に見守られつつ逝きし叔母眠れるような淡きルージュに
百三歳長らえし命を守り来し人に介護の支え喪せゆく
亡き叔父の顔して従兄弟行めば会わざりし時の長さ茫茫
また会う日あるやなしやと思ひつつおもむるに辞す叔母を送る夜
力なくまた会いたしと手を握る介護疲れに眼を病む従姉妹
わが母を姉と呼びたる叔母の声聞こえずなりぬ五月の空に
事故に逝きし三歳の子と百三歳命の重さふとも思えり

玉井綾子

音

・羊

布団カバー開くファスナーの音高く生あたたかな夢揮発する
デニッシュを包む白紙香ばしき音吸えるだけ吸って透けゆく
やかましく混ぜる卵液出版社する前から会議の助走を始む
葉箸でかき出しきれぬ卵液の濃い黄は水をかけても黄色
掛時計の外されし壁見るたびに二つの欠落感が挙手する
昼の月を背景にして直線に進む飛行機 フローティングペン
音のせぬ宙の飛行機と昼の月われと競える存在感を

虎谷信子

五月

・伴

両陛下なごやかにされ、迎へらる。トランプ大統領を 皇居の苑に
高らかに両国 国歌ながるるや、大統領よ 平和を覚めよ
大統領 大角力をば観られたり。勝者に大きい賜杯を 賞し
アメリカとのマナアの違ひか、大統領夫人 宮中会談脚組み居ます
あちこちの薔薇園便りきくからに、観にゆけぬ身バラが咲いたの唄
あの頃は 紫のバラ珍しく、手にあふれ持ち 青春つむぐ
薔薇めでつつ青春談議、「青春とは花狂ふ性の試練」と云ひし人はも

中島央子

平成辰

・森

飛鳥山さくらさくらの桜風亡き友の来る一日を遊ぶ
日だまりに老い人一人佇ちつくし集めし日差し飲み干してゐる
ともがらの儚くなりぬまた独りアドレス帳に棒線を引く
連続の十日がほどの休日を渋滞情報ななめに見てゐる
水を買ふ時代となれる生活を昭和の頃はおもひみざりき
平成に建てたるわが家の三十年吹き抜け天井見上げてゐたり
わが裡の気重さひとつ励まざる青麦畑の芒天を指す

中島 義雄

なんちやもんちや

・岡

あかときの光満ちくれば咲き満てるなんちやもんちやが空に際立つ
なんちやもんちやの枝分かれせしところより一夜泊りの鳥が発ちゆく
幻を視ることかりと取材記者カメラ構へて木下を巡る

苗代に行く前ちよつと見に来たと鎌を担ぎて花の下に来る
なんちやもんちやかあんにやもんにか口々に人来て仰き写しては立つ
樹に触れて離れて仰ぐ花の枝日陰日おもて白を分かちぬ

白妙のなんちやもんちやの暮れゆけば遠離のごとく影が薄づく

永塚 節子

岩 絡

・銀

はつなつ風の風を知らせるしだれ桜今日のもやもや離りゆくまで
いながらみ何いわかがみ東慶寺の記事を讀みつつ何かしら菱
岩絡いわかがみ否いわたばこほぐれぬままに頭の中めぐる
東慶寺の傾りをおおうはいわがらみ岩煙草の花頭に描きつつ
いま一度記事讀み直し納得す今日の主役はいわがらみなり
嬉しきこと一つあります頂きしえにしだざわわ黄の波を打つ
店先に春を知らせるえにしだに咲かぬわが家の花重ねいし

萩 葉子

小松菜

・銀

上野駅公園口にて待ち合わせ 桜花見にくる人みんないい顔
小松菜に黄の花咲いた嬉しさを妹に告げぬ六月に入りて
短くなった3B鉛筆ご苦勞様と捨てることも出来ず

朝朝の「みんなの体操」一年つづけたこほうびはピラフのランチ
初夏にきくピアノニシモ遠い日の合唱コンクール クラスの顔顔
国道をバスで渡るときこの時季は窓から見える赤い夾竹桃
アクセサリーはプレスレットひとつ久々に友を誘いてふたり旅

白子 れい

十七回忌

・洛

めぐりの山みどりふかまる中にありてポコポコポコと樟の若葉よ
師の逝かれ御仏前にて掌をあわす慣い何時しか十七回忌

眼鏡のおく笑みます短歌の師の遺影に真向かいて座すひとときの寂
ききたきこと話したきこと数多あるも師はもの言わず唯笑みいます
もつともつと尋ねておけばよかつたと氣付くはおそし師は語りませず
ひさびさの車窓に眺むるつつじの丘紅白とりどり咲き競いおり
ふるさとの丘にて描きし青春の理想果たすなく凡々の日々

ばばりようこ

三匹とふたり

・鹿

三匹のそれも大きな犬のせて北から南へと初のキャンピングカー
第一声「ただいま函館に着きましたこれからフェリーでしばし休息」
天蓋に雪を被かせ南下せしが桜吹雪に染まるはいずこ

とんぼ釣り今日はどこまで行ったやら三匹とふたりの行き当りばったり
道の駅で車をとめて車上泊 温泉もあると温とき声で
いまだどこだどこだと地図をなぞりいて机上の参加も満更でもなし
新緑を車ごと浴び北帰行さんびきとふたり全国踏破

浜 谷 久子

ふるさと

・地

振り向けば夕闇 そろそろ故郷に帰れと波の音が聞こえる
砂を巻き打ち寄せる波テングサの溜びる浜に立つ日はいつと
故郷にも浮き世はあるか根無し草憂きこともまた生きのしるしと
故郷に変わらぬものただ一つ海辺に毎日いたいと思ふ
浅瀬貝絶えてひさしく復活の兆しのあると風のためよりは
鳩小屋に小鳩はいない故郷にわたしはいない風吹くばかり
思い出は時のまにまに風化して貝殻のなかに小さく納まる

浜本 芙美

花束

・夢

かしましく飛び交いていし小雀の見えなくなりて日の高くなる
衣食住こんなものかとしぶしぶと納得をする八十代は
短歌雑誌机上に重ねなんとなく距離感のあり 空はにびいろ
季の来て路傍のあらくさ其其に花を咲かせて自己主張する
このところ姿を見ぬと心配をしてくれる人あり心うれしき
子のなき吾の誕生祝抱きて立つ汝が顔も胸も花束のなか
木々の芽の美しき径じわじわと宿痾が頭もたげゆく季

檜垣 美保子

囁り

・昴

雨の日の駅前大橋なだらかにのぼりてくだるやさしき角度
八本の車列にはげしき水しぶきヒルに見下ろす無音なる景
背もたれに半身をあずけ菜のごとゆるるひかりとかけをみており
つくばいのふちに水飲むすずめ二羽見て見ぬふりの十秒がほど
野のおそびおしえくれしは母なりき街の五月のなすなクローバー
はれわたり上機嫌なる朝空に長くうつくしき鳥のさえずり
胡蝶蘭さきさきつぼの花ひとつ落ち事はなりゆきしだいの六月

福田 庸子

窪地

・今

散りしける花の色牙ゆ毀たれし道の窪地にいくつもの春
降る光鳥の声染む叢となりたる道をしまたどりて
山降りし一家の残す花満てり在るままに生く光となりて
花びらも蕊も濃きまま散りしける桜よ今年に誰に見せしか
足許に受く華やきのいたましく山桜散る人住まぬ里
幼少の記憶に夢を開くとや如月に母は筈探す
山菜を穫る楽しみを残しるる母の視野には春の豊かさ

藤田 美智子

早苗田

・新

雲に名前をつける頃、君の声とときに聞こえてわれを励ます
通院に少し遠回りの道を選る早苗田泳ぐ鴨を見るため
ひまはりの畑増えたり震災後に役目を背負ふ花にさせられ
鳴り出せる携帯押さへ出でゆきぬ泣く子を外に連れ出すやうに
断つことになる絆とは思はざりき共に笑みある写真出できぬ
窓につきたる雨粒つと流れ落つ似たるひと筋見し記憶ある
雲はらふ力が山にあるならむ徐徐にくつきりと姿あらはす

藤森 巳行

彦さん

・銀

我の来るその日を待つてゐたやうに義弟は十日後、霊山旅立つ
幾万人に料理を作りし手を握り彦さんと呼び掛く生命に届けと
新阪急ホテルの厨房仕切りしは総料理長、義弟の彦さん
後継の料理人等に親孝行説く総料理長料理は心と
人々に料理を通し喜びと幸せ与へた人生称へむ
師のために作りしデザートワインゼリーおかはりされたと喜び語る
次の世は実の兄弟で生まれよう船津家姉妹の夫はやめて

船田 清子

清やかに

・天

「令和とは上から目線で気に入らぬ」電話の奥より友の立腹
「令」の字は神意に耳を傾く意 人清やかに和み合ふべき
人の性利他より利己に傾きやすく地球の未来に輝くや青
よたよたとシルバーカー押しスニーカーにたどり着きたり 「あつ／＼定休日……」
帰り路のわが足元に底紅の白き星花ほほゑむ三つ
眺めつつニハセキシャウにやと案ずるに「節約出来てよかつたね」とはな
行く春の足音ならむかさふさと闇をつつみて天降り来るあり

牧 雄彦 カムーの村 ・大

どこまでも続く道なり白き道はるかにとほしカムーの村はカムー族の村に入れば道の辺におうなが二人葛の糸ひくおうならが葛の糸ひき編む袋味はひ深し山の香のして葛多き手に編む葛のバッグなり素早く仕上げ買へといふなり葛の糸ひきてひねもす編み続けをみなは老いけむわれにほほゑむ村はづれ藍の畑がひろがりていちめん小さき葉が光りたり丁寧に植ゑらるる藍の畑なり代々受け継ぎてなりはひとせり

松浦 禎子 橋 ・羊

この橋の欄干に寄り写りいしリッカ・アツコの時に寄りゆく太鼓橋のごときまあるい橋の上の板目踏みゆくこもベネチア雲の上に光あつめて暮れかかる河岸にもどりし船の向うに流れゆく運河にそいし石壁の黒ずむ歲月、ひと生き継ぎて運河ゆく小舟棹さす青年のカンツォーネゆるるベニス空へ裁判所より牢屋へと曳かれゆく溜息橋とうこの世の果てにベネチアのかなしみ捉えし須賀敦子この地の下を水流るると

松 永 智 子 灯 ・嵐

ビルの外の音に親しむことのなくひとの終り灯をともすなり窓ごとにともる灯火見であるに声きくことのあらず夜のふけ音荒く車の止まりそののちの闇ふかくして音のなくしてあかときの雲に語れば窓ちかく一羽のガラスいつく指しゆく闇ふかき衝を夜すがら照らす月うす雲かかりそのままにしてとどけたきことばうしなひこの夜を閉ざすべくしてカーテンを引くたれにいふことばにあらむ茫々と明けゆく空のままなり消えたり

三 浦 好 博 タイミンク ・銚

この峠を跨ぎてあまた鯉のぼり水子供養のごとく静けき「みつともない憲法」などとあのひとが吹聴するときそれは輝く政權の浮揚策とし大当たり元号そして代替はり儀式トランプ氏の嘘の回数一万回ワシントン・ポストが日本にも欲しい戦前もかく戦争に進みしかメディアその他の寒き改元糠に釘の辺野古の地盤に旧札と新札放りて基地作る嗚呼改元に騒がしき世を逃れむと思はねど公園の草刈りに来し

宮 本 靖 彦 晩春の庭 ・凌

花枯れしチューリップ花壇に余りたる芋苗豆苗植ゑた。どうなる草引の手を泣かせぬるかたばみの今朝一面に黄小花咲く庭木よりつき来し毛虫一匹を机上に見れば這ひなまめかし春の花をはる季節の朝まだきいたちこの家に帰りしけはひ夏帽子リュックの吾を疎外して朝電横席空いたままる黒犬は山装のわれ避けゆきぬはつかに残るか男のにほひ老歌手ゆきそひの葉書ソプラノも古れどア・グレイス聴きに参らむ

三 好 聖 三 がかんぼ ・伊

ばあさんの今朝の様子を見に行けばベーコンエッグを食べてけと言う友達も知人もいない君だから葬儀は無しと妻がのたまう葬儀ならご随にどうぞ死人の僕には既に関りも無し鈴懸の緑かがよう朝五月君が轢かれる寸前の街がかんぼがべたりと止まる深更のテールブルクスの花柄の上啓蒙の臭いがするから逃げてますくわばらくわばらくわばらでたらめが僕の教師の教えです刑事ゆがみを地でゆくような

御代田澄江

若葉風

・茨

そより吹く風穏やけし令和元年 祝膳ととのへ気持ち改む
 行動派の友の決意の記名読む「安倍改愆に勝つ」と新聞に意見広告
 誇らぬめげぬを己に約し今日ひと日書を読む庭に若葉風吹く
 ベチュニア鉢「紅水晶」とふ母の日にと子より届きぬ日向に出さむ
 クレマチスうす紫に咲き揃ふ賜ひし友亡く悲しみ泌む色
 タックスフンドつれて訪ひ来し友にして先輩先輩と親しく語る
 県会議長の夫君支へし友逝きて三年後夫君も追ふ如く逝く

茂木 斌

坐摩神社

・埼玉

偶然の出会いだなんて無理だから約束の出会いにしましよ五月京都で
 御堂筋に坐摩神社を訪ね行くメトロ本町出口は五番
 芭蕉翁終焉の地のまた近し一石二鳥の御堂筋なり
 坐摩神社久太郎町四丁目渡辺の地に鎮座在す
 ここがかの渡辺綱に係れる渡辺姓の発祥地なる
 水無瀬神宮参拝終へて山崎へひとり西国街道歩く
 百歳を期頤と呼ぶごと五経なる「礼記」のうちにあるを確かむ

もとむらしげと

晩春

・そ

風呂敷をさげて語れる人ふたり小手毬の白咲く山蔭に
 滅びゆく花と生まれいずる葉と挨拶かわす桜の春は
 葉桜の輝くみどりを褒むるとき人は密かに花をうらきる
 鳴りつつく雨すら最後の雨という平成最後があふるる世間
 背もたれを倒して見ゆる空の青詩人ハインネは孤独を愛す
 さみどりのくきやかに立つ一本の樹は夏空の雲と対峙す
 暗黒の天体に吸わるる限りなき星ありと聞くこの空の果て

八乙女由朗

到来

・柴

植込みはさつき紅花多くして季節もたらす仄かな匂い
 いくたびか地震に倒れし傷痕を見せてさやけし石燈籠は
 廊を入りて迷い落ちたる親燕触るれば柔し燕のからだ
 拾いたる燕のいのちあたたかきそつなく生きよと宙に放てり
 車庫に宿りし囚われの躰放つときすがしく聞けり椋鳥の声
 馬洗いし用水堀にて水泳をおぼえたり一生役立ちにけり
 衣類番なしたる妻は泳がずに過ぎていまだも金槌を言う

山下 雅子

スイッチ

・習

覚めやらぬ咽をこくりと富士の水今日の始動のスイッチが入る
 病窓に見るあじさいはちらほらと藍色ほどく五月の空に
 単調な明け暮れの日々さみどりの木々は蔭増す青葉となりて
 連れ合う蝶はたのしげひらひらと黄のいのちの舞う自在さよ
 画像を指しガラスの骨格と医師の声高齡の身を穿つ鋭き声
 江戸切子江戸切子がよい江戸っ子の血が囁くよガラスの骨格に
 リハビリを終えて苦しき筋肉痛われにまだまだ筋肉がある

横田 敏子

真夜中のメール

・福

真夏は梅雨飛び越えてやって来た一寸待ってくれ付いて行けない
 万物がとろんと眠っているような真空状態の昼下がりに
 軒下のピオーラ、ベチュニア、アマリリス熱射に打たれ息絶え絶えし
 炎天に帰りに汗ばむシャツ脱げばむっと籠りし陽の匂い立つ
 夕べ撤く水は命の水ならん花も庭木も吾も生きかえる
 真夜中のメール怖す怖す覗き込む「喜寿を古希に」と歌稿の訂正
 秘密と言葉抱きし日も遥か今は秘密とするものも無く

吉永惟昭

紫陽花

・熊

筆を擱き一息ついて目葉を差せば驟雨に踊る紫陽花

紫陽花は色づき初めぬこれの世の毀誉褒貶に倚るを示して

異変あり令和の皐月紫陽花に似合わぬ螢の迷い来るとは

七変化朽ち果つ前が慈悲なると坊守は首剪り落しゆく

紫陽花と囁きもだす日もありし今掛け交わすは代名詞のみ

干に耐え変化の色を前に乞う被爆の妻の紫陽花魂

一つ吸い二つに吐く息走法に生かしし章駄天 耳朶の豊けき

久我田鶴子

羊雲

・羊

〈羊雲〉の文字のゆらぎや先生の後ろに聴きしかの日のコジユケイ
短歌にてつながる縁だじの中心に小野茂樹あり香川進あり

身の近くにも言ひくれしはいくたびぞ短けれども遺る言の葉

きよんとしてゐるわれにさりげなくつけくれし道 さうであつたか

いまにして思ひ至れること多し恩愛といふにわれは疎くて

夕暮の周辺にわれを位置づけて逝きにし人よ さういふことか

先を読み布石を打ちしその石のひとつとしてのなりゆきならむ

■石のうた■

動きゆくものととまらず生と死と

つながんとして石ひとつあり

香川 進『死について』

香川進の生きものの歌 10 田土 成彦

・群羊のかたむける頭みなやさし死のキリストのくび

かくかたむく

『甲虫村落』タンゲルウッドより

ドラマなどでは首をかくんと落として死の瞬間を明確化する
場面がよく見られる。演出としてはわかりやすいが実際の場面
ではどうなのだろうか。さてこれは屠殺場に曳かれてゆく羊の
群れの描写と思われる。「鉄の缶にたくわえらるる羊頭が五分
にひとつくらいながれて見ゆ」という歌につながってゆく。
かつてはヒトよりも個体数が多い唯一の哺乳類として羊の名が
上げられていたが、世界人口七〇億人超の現在ではどうなのだ
ろう。さて、キリスト教の象徴としての十字架と、そこに磔刑
に処されて死を迎えるイエスの姿はヨーロッパの絵画などで屢々
目にすることがある。私的な体験はないが、教会の内部にも常
に見かけられる姿なのかも知れない。絵画としてはいくらか頭
をかたむけた肩から項につながる曲線に万感の想いを込めなけ
ればならないだろう。「神はどうして私をお見捨てになつたの
ですか」このイエスの最後の問いかけをその象徴的な頭の傾き
だけで解いてゆく事は出来ない。ただ香川進は羊の行動にその
解を見いだしているのかも知れない。この歌の三句目「やさし」と
捉えている言葉に注目したい。イエスも羊たちも同じように
頭をやさしくかたむけて死についた。理論ではたどり着けない
が感覚はひと飛びにその関連を示唆しているようだ。

香川進の略歴

佐久間 晟

ここで香川師の略歴を述べておこう。明治四十三年（一九一〇年）七月十五日香川県多度津町生まれ。平成十年（一九九八年）十月十三日、自宅赤堤にて死去。八十九歳、法名「宗昌院仁徳進暢居士」。この日を香川家の家紋に因み「九曜忌」と呼んでいる。

大正七年十一月、師が八歳の時母だけ死去。父照治は表具師であった。以下、詳細は『香川進全歌集Ⅱ』を参照されたい。兄弟は男五人、女四人の九人兄弟の四男。内、妹二人と第一人は若くして死去。

隠れたエピソードを幾つか。

中学を卒業して、地元の高松高商と神戸高商を受験したところ、Bクラスの高松が不合格で、Aクラスの神戸に合格した。このあたりにも香川師の強運の影が見られる。それで神戸に下宿。四月に白日报社（『詩歌』）に入社。入社経緯は不明。こゝ

で同じ神戸に嘉納とわ（酒蔵「白鶴」・後に欣松学院の理事長が居ることを知り、短歌を習いに出向いた。何か月か過ぎた頃、香川師の才能の只ならぬものを知り、とわは兄弟子の近江の米田雄郎に預けた（その後香川師は嘉納とわに習字を習った）。豪快な雄郎と香川師はウマが合ったらしく、師は足繁く雄郎の元に通い、終には家族同様の間柄になった。そして、雄郎の長男登に、師の長兄の次女京子を嫁がせた。

次の話は、師は三菱商事に入社したものの、戦後の財閥解体で、自社「東亜交易」を設立したが五年程で倒産し、木下産商に就職したこと。入社の挨拶に社内を回った時、総務課長だった足立三郎は香川師に、こんな歳をして再就職とは何とあわれな奴かと思ひ、「しっかりしろ」と檄を飛ばしたそう。それが後で短歌の長老の香川進と知り、平謝りに謝ったというエピソードもある。

そして次は、余談中の余談。先程の嘉納とわの学校では、東京への修学旅行の際は、「地中海社」（香川邸）に寄ることが通例となった。そこで香川師は若い男性学生を自宅に呼び集めておいて、女子学生の話相手をさせた。これが機縁で神戸と東京とで結婚した者が数組出た。個人名は省略する。

◆独り言

当時、「地中海」には、一郎から五郎までの五人が居た。山崎一郎・柳二郎（小野茂樹）・足立三郎・市原志郎・菅野五郎である。

今日の二人

ふだん

遠藤千恵子

難産の母とおととの病室を父とおとなふ枇杷の実持ちて
顔よせて母とおととと西瓜食ぶ昼寝のあとの体めざめく
諭されて頷く我と弟に大き赤梨母むきはじむ

薦被りでんと据ゑられかたはらにみかん積まるる祖父の正月
レモンの香閃光のごと身を射しぬ白き齒のきみはたちで逝きぬ
何時か知ら消えてしまひしインド林檎おもひださざる思ひ出のふゆ
ざつくりとパイナップルを剥く母の白き両手が果肉あらはす
寅年の老いても子には従はぬ母がすつくと樹のポーズとりぬ
時差惚けの解けてオレンジ食ぶる母ひとあちちがふほんばのあちは
うぢすじやう育ちよろしき佇まひメロンに銀のフォークをたてぬ
六月は我が弟の生れ月庭に満ちるるみかんの香り
夜の卓に水蜜桃を食べてゐる父と母とは駆け落ち婚ぞ
病身の父であれども姿勢よく静かに強く肉食みてをり

母のなげき

「お父さん、どういうことですか親より先に子供が老人性って」「お母さん白内障は先天性、併発性それに千恵子さんのように加齢によるものがあるんでね心配しないで大丈夫ですよ」「でも子供が老人性って変でしょう嫌だわ、ねえ」平成十四年四月に五泊六日の入院で両目の手術を受けました。片道一時間の医院へ助手席に母を乗せ父が毎日来てくれました。術後は良好で病院食も美味しく快適でした。が、五月になり虹彩炎と続発性緑内障が発症し、注射やレーザーの治療が翌年四月まで続き失明の懸念も抱きました。今は長年使ったコンタクトの装着の煩わしさもなくレーシックの手術を受けなかったことも幸いして安定しています。焦点を読書にあわせてたので裸眼で辞書を引くことも出来て楽です。しかしそれ以上の距離になると存在は見えても細部は見えず知り合いいにも気付けないので困っています。信号のない横断歩道で止まってくれた車の人の表情が判らない、だが多分良い人柄かと思ひ笑顔で会釈し渡ります。通りの向こうで手を振っている人がいても誰か解らないのです。だから私は伏し目がちに歩いています。目の前で名前を呼ばれるまで。

今月の二人

地球儀

丸山 修

「スターティングオーバー」遺し逝くレノン愛を教わる十五の冬に
 ミンサーの市松模様五つ四つ「いつの世までも」愛を伝える
 梅見酒ベンチに遺影と缶ビールかぐわしき香は女を包む
 海峡の海さえ広しこれほどの地球に乗りて我は生きている
 一面の翠濃くして山の端の果てまで続きたまねぎ畑
 首かしげ何かあったかと問いかくる猫の瞳に素顔のぞかる
 「お疲れ様」のひとつとだけで救われる魂ありと深夜のラジオ
 子らの待つ巢へとまっすぐ初燕八軒家浜に桜咲き初む
 花散らしの風吹く駅舎すぐそばに初夏告げるジャスミン見つく
 漱石がなりたかったのはこれほどの小さき董か朝の水やる
 日々通る花屋で二度見するほどの紫清き鉄線の花
 元興寺怪談ナイトの講談師声が灯りを小さく揺らす
 争いのなき世というか平成は地球儀を手にくるぐるまわす

目線をほんの少し変えて

自らの目線をほんの少し変えてみる、例えばほんの少しだけ上目遣いしてみたり、必要以上に左右を見回してみたり。そうしているうちに自分が普段眺めている風景でさえ違って見えることがあります。日々の通勤電車の風景でさえ様々な歌材を与えてくれます。

歌材を得ても、歌にすることは今の私にとって荷が勝ちすぎて大変なのですが、ここに出詠した十三首はそんな日々の生活から生まれたものです。

添削していただいている牧先生からは、常々「調べを整えて、美しい言葉で」「そこに诗情はあるか」など難しいことばかり。難しいけれど刺激的です。楽しんでます。

こんな私でも大阪支社のみなさんはいつも温かく見守ってくださいます。毎月
 の歌会の場でものびのびと発言できています。
 歌会で発言し、自分の意見を述べ、指摘
 され、考えることが何よりの勉強の機会であ
 ることを実感しています。

お世話になっている皆様への感謝の気持ち
 を美しい調べにのせて伝えることができ
 たらどんなに喜んでもらえるだろうかと思
 いますが、それはまだ先のことになりそう
 です。

◆今月の二人・遠藤千恵子作品評◆

レモンの香閃光のごと

遠藤さんは、前田夕暮の生まれた秦野市在住。今回の十三首は、果物の思い出とともに家族のことが詠われている。

・難産の母とおととの病室を父とおとなふ枇杷の実持ちて
難産の末に生まれた弟。産後も入院していた母に、父と二人で枇杷の実を持って会いに行ったのだろう。枇杷の実の色や形に、季節だけでなく、幼かった作者のその時の思いまで想像されてくるようだ。現在形で詠われていることにも注目した。

・顔よせて母とおとと西瓜食ふ昼寝のあとの体めざめく

夏の午後、母と弟と三人で顔を寄せ合って食べた西瓜。西瓜を食べているうちに、ようやく昼寝のあとの体が目覚めてくる。その感覚を今も忘れずにいる遠藤さんである。

・レモンの香閃光のごと身を射しぬ白き歯のきみはたちで逝きぬ

上の句、ただ事ではない。レモンの香には、鋭い痛みがある。「白き歯のきみ」は、あるいは弟であったか。二十歳という若さの死が、白き歯とともに焼きつけられる。

・うちすじやう育ちよろしき竹まひメロンに銀のフォークをたてぬ

〈氏素性、育ちよろしき〉と形容したくなるメロン。それに對抗するには、〈銀のフォーク〉しかないか。ぐさっと立てる。

・夜の卓に水蜜桃を食べてゐる父と母とは駆け落ち婚ぞ

水蜜桃を食べているのは誰だろう。〈私〉なのか、父母なのか。それによって、すいふんと歌の雰囲気が変わってくる。三句で切れて、食べているのは〈私〉と読んだが、どうだろう。

◆今月の二人・丸山 修作品評◆

地球儀をぐるぐるまわす

評者・久我田鶴子

丸山さんは、大阪は吹田市の在住。作歌するのは難しいけれど刺激的と、楽しんでおられる。

・ミンサーの市松模様五つ四つ「いつの世までも」愛を伝える
・ミンサーは沖繩の織物。四角い模様の「五つ四つ」には「いつの世までも」の思いが籠められ、もともとは女性から男性に贈られたものだという。そのことを知ったときの喜びの一首。

・漱石がなりたかったのはこれほどの小さき童か朝の水やる

「童程な小さき人に生れたし」と詠んだ漱石。その句を思いながら、童の花を見、朝の水やりをしている。漱石がなりたかったのはこんな小さな童だったのかという思いは、漱石の感慨をそのまま肯定するものではなかったようだ。結句の「朝の水やる」という行為が、漱石の句を「そんなもんかい」と、現実的に切り返している。

・元興寺怪談ナイトの講談師声が灯りを小さく揺らす

「元興寺怪談ナイト」、そういうイベントがあったのだろう。怪談とあつては、話の内容も怖いだろうが、講談師の声もまた怖さを増幅させていたことだろう。灯りが揺れたのは実際には風のせいかもしれないが、声が揺らすと表現し、講談師の話に命が吹き込まれていたことを思わせる。

・争いのなき世というか平成は地球儀を手にくるぐるまわす

平成から令和へ。平成時代を振り返って「争いのなき世」だったと言われているが、そうじゃないだろ、世界を見ろよ、というのが作者の主張。「地球儀を手にくるぐるまわす」の具体によって、抗議の声を強く響かせている。

六十年くらい前のことです。私は初めて「短歌」のリズムを知りました。

太平洋戦争の終戦を経て、国中が少し落ち着きを取り戻した頃でしょうか。私が小学校五年生ぐらいの事です。

両親は、今で言う「インテリア業」の室内装飾の店を細々と開店しました。父はセールスや施工の業務を、母はカーテンや綴帳作製のミシンがけ等々、夫婦して、朝から夜遅くまで働いていました。

夕食後から就寝までの間、毎夜、ラジオを聴いたりもしましたが、父も母もノット等に、何かを書いたり考えたりして、夫婦して仲良く語り合っていた事…。それが「短歌」、歌づくりでした。

短歌のリズムは子供の私にとっても快いリズムで、父母と一緒に指折りながら「五・七・七・七・七」と何かをノートや広告紙の裏に書いて遊んでいました。父も母も「良い」とも「悪い」とも言わずに私の「たなか」を受け入れてくれてました。それが私の短歌との初めての出会いです。

「五・七・七・七・七」の快さに惹かれるばかりで、とりとめの無い歌ばかりでしたが、両親と一緒に指折り数えながら作っていた日々でした。

高校生になると、石川啄木の歌が好きになりました。その頃の我が家は父の会社の

経営が不振となり、七人兄妹の長女である私は、物事を少し深刻に考えるようになりました。十代の悩み事や家庭環境などを愁いたりして、啄木の歌集に涙したりもしました。思春期の心の何かが突然、短歌をシャットアウトしてしまいました。高校卒業後、社会人として働き出し、仕事や友人との語らいが楽しく、全く短歌は忘れ



てしまいました。そのような時から、更には時が流れ、十五年くらいを経て結婚し、子供も授かり、子育てに追われて、ますます短歌を忘れていました。

しばらくして、将来を考え京都の「〇〇書房」でパート勤務を始めました。仕事柄、再び短歌の本にふれる機会を得て、十代の頃に感じていた三十一文字の快いリズムと

再会。さらに口語短歌の『サラダ記念日』が目飛び込み、惹かれる私がありました。難しい言葉を使わなくても、日々の当たり前の事や、話し言葉に新鮮な感動が巡り、また短歌を詠みたい…という思いの日々でした。

その頃に住まっていた自治体の短歌サークルで学ばせて頂く機会が有り、また、転居の末、現在、お世話になってます。城陽市での短歌サークルに参加させて頂き、「地中海」の船田敦弘先生のご指導を頂く事になりました。船田先生は奈良市や大阪市から城陽市まで通って下さり、無知な私にも親切に、文法や「オノマトペ」や余韻のような表現方法を教えて下さいました。船田先生は急逝され、本当に残念ですが、サークルの一人一人に作製して下さった「短歌集」や撮影して頂いた写真等、思い出もたくさん頂きました。また短歌の魅力へと導いても下さいました。先生を失い、私達は寂しくなりましたが、今現在、お世話になってます。坂上直美先生もまた、京都市内より、府下の城陽市までご指導に来て下さり、何かとアドバイスをして頂き、毎回、楽しい短歌会です。新古今和歌集も学ばせて頂き感謝しています。ありがとうございます。